

令和4年度 府立桃山高等学校(全) 学校経営計画(スクールマネジメントプラン) (実施段階)

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
<p>○文武両道・自主自律の校是のもと、学習と部活動の両立を図り、知・徳・体の調和のとれた創造性あふれる心豊かな人間の育成を目指す。</p> <p>○SSH3期目の指定のもと、SSHを本校の中核的な取組とすることで、教育活動の充実を図り、資質・能力「5C」(*)を身に付けた、次世代社会を創造し牽引するグローバルサイエンス人材の育成を目指す。</p> <p>○公立高校の中核校として、次代を担う人材の育成を図るとともに、府民の期待に応える学校づくりを推進する。</p> <p>○新学習指導要領を踏まえた教育活動を推進する。</p> <p>*5C 本校では、グローバル化とサイエンスの発展が重要となる次世代社会において、国際的に活躍し得るグローバルサイエンス人材に必要な資質・能力を、以下の5項目として育成を目指している。</p> <p>①Critical thinking and problem solving (批判的思考力と問題解決) ②Creativity and innovation (想像力と革新) ③Collaboration (協働力) ④Communication (コミュニケーション力) ⑤Challenge (挑戦力)</p>	<p>(1) 「自主自律」ワンランク上の「文武両道」など、本校の特色や教育理念、またSSH3期目の指定校としての取組等を中学生・保護者に伝え理解を得て、前年度に引き続き、学習意欲が高く本校の様々な取組に高い関心のある入学生を迎えることができた。今後は、入学してきた桃山高校生・保護者の期待に応えるべく、これまでの成果の上に立った、さらなる高みを目指した教育活動を展開していきたい。</p> <p>(2) SSH事業において、普通科・自然科学科とともに、GS探究の充実が図られるなど、探究的な学びが進み、その成果が着実に次世代で活躍する人材としての資質・能力の育成につなげることができている。今後は、3期計画の実践を着実に進め、SSHを学校の文化として定着させていきたい。</p> <p>(3) 組織的な教科指導や進路指導の実施に努め、進路実現に向けて、学校全体で最後まであきらめない指導を行った。結果、国公立大学や私立の大学に、多くの生徒が現役合格でき、難関大学へも積極的にチャレンジしてくれた。今後は、生徒の学びの志向性にさまざまな刺激を与え、より高みを目指す進路目標にも積極的にチャレンジできるような組織体制の確立や、生徒の意欲に火をつける学習・進路指導を継続していきたい。</p> <p>(4) 新学習指導要領や新しい大学入試制度に対応するため、「主体的・対話的で深い学び」への授業改善、記述力や英語の4技能の向上に向けた取組など、組織的に計画的に取組を推進することができた。今後は生徒の多様性に目を向けた、「個別最適化した学び」の構築や、学びにおけるICTの活用を進めていく必要がある。</p> <p>(5) コンプライアンス意識の低下による問題事象が発生したことを受け、さらに意識を高める取組を進めていきたい。</p>	<p>(1) 「主体的学習者」の育成に向けて、「主体的・対話的で深い学び」への授業改善、学びにおけるICTの利活用、生徒の多様性に目を向けた「個別最適化」した学習指導等の研究・実践を進め、桃山高校の学びのデザイン再構築を行う。</p> <p>(2) より高みを目指す進路目標にも主体的・積極的にチャレンジできるような組織体制の確立や、生徒の意欲に火をつける学習・進路指導を継続して展開する。</p> <p>(3) SSH3期3年目である今年度も、「資質・能力5Cを身に付けた、次世代社会を創造し牽引するグローバルサイエンス人材の育成」という目標を、教育活動全体に落とし込み、全校体制で実践していく。</p> <p>(4) 生徒が主体的に「夢・感動・挑戦」の舞台を創り上げることができるような「学校行事」の検討や、生徒が自ら高みに挑戦することによって実現する「高いレベルでの文武両道」への仕掛け作りを行っていく。</p> <p>(5) 教職員自身が桃山高校生にとってのロールモデルとなることを目指し、桃山高校働き方改革を進めるとともに、高いコンプライアンス意識をもった教職員集団を形成できるよう努め、生徒にとっても教職員にとっても魅力ある学校を作る。</p> <p>(6) 感染症拡大に伴う教育への影響が長期化する中、衛生管理をしっかり行い、安心・安全な学習環境を確保するとともに、学校における学びの経験を保障する観点も大切にして、一つ一つの教育活動を再点検しながら学校運営を行っていく。</p>

●令和4年度「学校経営計画（スクールマネジメントプラン）」実施段階●

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
				最終	
教務部	「主体的学習者」の育成のための教育活動や授業改善の取り組みを支援する。	新学習指導要領及び、一人一台端末導入学年である令和4年度入学生について、教育活動をより効果的に行うための教科指導や端末活用の工夫を教科を超えて共有するための取り組みを行う。	B	B	新学習指導要領や観点別評価、一人一台端末については、公開授業を実施し、教科を超えて参観を呼びかけた。公開授業や教科主任会議を通じて一定程度交流や共有はできたものの、今後の方向性を打ち出したり、より具体的な取り組みの共有には至らなかった。学習やその他の課題を抱える生徒については、保健部、担任、及び教科担当と連携し、各考査前に情報を全体で共有するとともに、補充を実施することができた。
		学年部、保健部及び各教科と連携し、特に学習に際して課題を抱える生徒に対して、補充等を通してきめ細かく対応する。	A		
生徒指導部	生徒が主体的に「夢・感動・挑戦」の舞台を創り上げることができるような「学校行事」の検討や、生徒が自ら高みに挑戦することによって実現する「高いレベルの文武両道」への仕掛け作りを行っていく。	球技大会 ○生涯にわたってスポーツを楽しむ能力や態度を培う。 体育祭 ○生徒会を中心に、生徒全員の創意工夫を生かした自主的な取り組みを行い本校のよき伝統を継承する。	B	B	【成果】○球技大会：種目を工夫・検討して実施し、生徒同士の良い交流の機会を確保することが出来た。○体育祭：桃山城公園で、体育委員を中心に検討を重ね本校の伝統を継承することが出来た。○文化祭：教室の電子黒板でLIVE配信を行い、伝統ある桃山高校の文化祭に近い形で実施し、文化祭を通して生徒たちの自主性を養う取り組みが出来た。 【課題】○今後も長寿命化工事の影響は続き、来年度以降の実施形態・実施時期も熱中症予防の観点と3年生の進路実現の観点の双方からより良い時期等の検討が必要である。○部活動において、積極的参加を促し、加入率の向上と活動実績の広報活動を行ったが、当初の加入状況から微減、途中退部数の微増が課題といえる。しかし、コロナ禍の中において生徒達は状況に応じた感染予防対策を行い積極的に活動に取り組んでいた。
		文化祭 ○生徒一人一人の自主性を養い、HR・部活動・生徒会の活動を充実させ、自主的集団として成長することを目的とする。	B		
		部活動への積極的参加を促し、加入率の向上と活動実績の広報活動を行う。	B		
進路指導部	国公立大学総合型選抜に願する生徒に対する指導体制を充実させる。	1 国公立大学総合型選抜出願事前説明会をおこない、出願準備から大学入学に至るまでの本校の指導や取組について周知徹底する。	B	B	1. 年々志願者が増加する国公立大学総合型選抜において、従来は行っていなかった出願準備説明会を2回実施するとともに生徒個々に合わせた出願指導を行うなど細やかに指導できた。 2. 従来行っていた難関大学進学希望者対象検討会、学校推薦型・総合型選抜出願希望者対象検討会、共通テスト後の国公立大学出願検討会に加えて進路指導に課題を持つ生徒を対象とした検討会を実施し、生徒の進路希望や学習状況についてより細かく全職員で情報共有した。
		2 3年生進路検討会の実施回数を増やし、生徒の進路希望実現に向けた課題や指導のあり方を全職員で共有する。	B		
教育企画推進部	「主体的学習者」の育成に向けて、「個別最適化」した学習指導等を実践するために、ICT環境を整備し、利活用を図る。	ICT機器の整備、使用基準の作成、研修会等を実施する。ICTに関する現状の校内ルールを見直し、機器やアプリケーションをより活用しやすい環境を作る。ひとり1台端末の導入に伴い、活用についての研修をすると共に、校内での使用ルールの明確化を進める。	A	B	機器の整備に関しては、コロナ対策のオンライン授業配信等で多数必要になる延長コードやHDMIケーブル等を十分な数確保すること出来た。また、主に配信用として使う端末についても、管理の仕方を見直すことで多くのクラスで同時に端末が必要になっても対応できるようになった。ICT関連に関して日常的に起こるトラブル事象についてまとめて、いつでも対応策が確認できるようにデータベース化し、だれでも対応できるように環境を整えた。1人1台端末の使用ルールについては年度当初から更新できていない。今年度通しての使用状況や問題点を集約し、次年度に向けてルールの見直しを行う予定である。
		説明会や学校案内の内容など、見直しを行い、より本校の魅力を伝えることができるよう改善する。多くの中学生、保護者が見るホームページの内容をより充実させる。	B		
		「資質・能力5Cを身に付けた、次世代社会を創造し牽引するグローバルサイエンス人材の育成」という目標を教育活動全体に落とし込み、SSH3期3年目の事業を全校体制で実施する。	B		
保健部	校内美化を徹底することで衛生管理をしっかり行い、生徒の環境美化及び衛生管理の意識を高め、環境保全能力を向上させる。	SSH3期申請内容に基づいて令和4年度事業計画の取組を実施し、効果検証と成果普及を行う。	B	B	令和4年度事業計画に従って、取り組みを行った。今年度は1年生自然科学科対象の京都大学防災研究所での実習と3年生自然科学科対象の英語ポスター発表会は3年ぶりに実施することができた。また、3年生のSSH行事を新たに実施した。2年生の課題研究発表会は、自然科学科普通科共に、観客を入れて実施することができた。効果検証については、生徒全員にアンケートを行い、SSH実施による効果の検証を行った。成果普及については、11月に嵯峨野高校、洛北高校とともに3校合同成果報告会を行った。
		月1回の大掃除の際には、教室及び廊下の壁に付着した埃や窓の蜘蛛の巣を取り払う作業を学年ごとに実施する。また、日々の清掃活動についても1週間のうち水曜日の清掃を、より丁寧な清掃活動実施日とする。	B		
		美化・保健両委員会の活動を充実させる。それぞれの活動により校内学習環境の衛生管理について啓発するとともに、感染症拡大防止等に向けた個人の責任ある行動を促す。	B		
		安全点検を学期ごとに実施して、事務部と連携して改善する。	B		大掃除の際に教室や廊下の壁に付着した埃や窓の蜘蛛の巣については、美化委員に点検させるなどして徹底することができた。ただ、水曜日の清掃活動の充実には具体策を講じることができずに課題が残った。保健委員会の『保健だより』や美化委員会の実質的な美化活動を通じて、校内学習環境の改善や感染症拡大防止の啓発活動が実施できた。 1学期に安全点検を実施したが、事務部への連絡に不備がありうまく機能していなかった。2学期末には、1号館の引越し等があり未実施でした。3学期は1月末に実施して改善できた。

●令和4年度「学校経営計画（スクールマネジメントプラン）」実施段階●

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			最終		
図書部	「5C」を身に付けた人材の育成、「主体的学習者」の育成に必要な桃山高校の「学び」を探究する。	図書委員による自主的、積極的な図書館運営（班活動、読書月間における各種行事の立案と実践など）を行う。	A	B	<ul style="list-style-type: none"> ・図書委員は主体的に図書館運営へかかわることができた。主体的学習は前進したが、今後もさらなる活動の発展に努めることが課題である。 ・「5C」を身に付けた生徒の育成に向けて、図書の実践・読書活動の啓発に努めたが、まだ改善の余地がある。 ・手指消毒等新型コロナウイルス対策をし、芸術鑑賞を実施した。
		課題研究をはじめとする各授業での図書館の活用や読書感想文集の発行、教職員の図書推薦などの様々な仕掛けを試みる。	B		
		「5C」に関する図書を充実させるとともに生徒に向けて紹介する。	B		
第1学年部	新教育課程の初年度となる学年として、学校生活の様々な場面で、主体的、自律的に行動できる生徒を育てる。	ホームルームや面談など、さまざまな場面で、学習手帳を活用し、個々の生徒の特性を把握しながら、生活指導、学習指導を継続的に行う。	B	B	面談や考査前など、指導の節目となる場面では、学習手帳の活用を通して、計画的な学習習慣の育成について効果的な指導ができた。一方、継続的な活用については必ずしも十分とはいえず、今後の課題である。
第2学年部	人とのつながりを大切に、協働して取り組むことで共に成長し合える集団を作る。その中で、生徒たち1人ひとりの他者を尊重する心や自己肯定感を育む。	各担任は生徒たち一人一人の気持ちに寄り添い、主体的学習者である生徒たちの成長を促す。学級や個々の生徒の状況を日常的に交流・共有し、複数の教員が多角的に生徒と関わる。	B	B	<p>【成果】●定期的に生徒との面談を行い、生徒たちの思いに寄り添いながら、各担任が慎重かつ丁寧な学級運営を実施した。●1年後の進路実現および卒業後のキャリア形成に向けて、同じ分野を志望する生徒たち同士での意見交流の場を設けることができた。</p> <p>●各分掌と連携しながら、講演会やSSH、探究の取組等を実施できた。また、遠足や研修旅行を通して、生徒主体の様々な取組を実施できた。</p> <p>【課題】●学習面および進学面において、不安を抱く生徒が増えている。より一層生徒に寄り添いながら、一人一人の個性を尊重し、生徒自身の主体性を引き出す必要性を感じている。生徒の適性や進路希望等を教員間で情報共有し、多くの教員が様々な機会を通して多角的に関わりながら支援していく。●模試の判定に一喜一憂せず、大きな目標達成に必要なスモールステップを一つずつ達成していくという意識を生徒が持てるような指導を行う。</p>
		GS探究Ⅱ、LHR、学年集会、学校行事、学年通信等を運動させ、個々の生徒の見方・考え方を学年全体で共有し、学年/学級集団への帰属意識を高めるとともに、価値観の多様性に気づききっかけを作ることで、学年/学級集団がさらに成長するための機会とする。	B		
		生徒たちが、進路実現までの2年間に見通しを持ち、主体的に進路選択ができるような指導を充実させる。特に進路実現に向けた課題設定を、生徒たち自らが行うような仕組みを作り、主体的な学習行動を促す。	B		
第3学年部	価値観の多様性を通して、自尊尊重の精神や主体性を育み、自己を確立しながら進路実現に向けて共に成長し合える集団を作る。	GS探究Ⅲ、LHR、学年集会、学校行事、学年通信等を運動させて、個々の生徒の見方・考え方を学年全体で共有し、価値観の多様性に気づかせる。	B	B	<p>【成果】定期的に学年通信を発行したり、学年会で意見交換したりするなどして、生徒・保護者・教員間で情報や価値観を共有しながら、教育実践を進めることができた。高校生活3年間の文脈（ストーリー）を大事にし、常に生徒に対して学年のメッセージを発信し続けた。3年間を通して、探究活動や自己のキャリア形成に目を向けながら、目的意識をもって高校生活を過ごさせることができた。</p> <p>各担任をはじめ、それぞれの教員の立場や特色を生かして生徒と関わり、集団・個別指導を進めることができた。進路面談はもとより、日々の生活の中で個人面談を設定するなど、各担任がそれぞれに工夫できた。</p> <p>進路部をはじめ他分掌と連携しながら、日々の生活指導や進路指導を進めることができた。</p>
		進路実現に向けた長期的な学習を意識させる。模試や面談等を活用しながら、節目ごとに計画を立てさせたり、自己分析を行わせたりすることで、主体的な学習行動を促す。	B		
		教員自身の人となり大切に、生徒一人一人の内面と深く関わりながら、日々の声掛けや面談等を行い、主体的学習者をサポートする。個々の生徒の学力や希望進路を進路部や教科担当者と日常的に共有し、複数の教員が多角的に関わる。	B		
事務部	限られた予算を効果的に運用し、安心安全を最優先に予算編成を行う。	安心・安全に向けた設備・施設の整備。	B	B	安心・安全な施設設備の管理や整備について適切に実施できた。長寿命化改修工事については、職員、生徒の協力のもと、仮設校舎への引越しまで進めることができた。今後は、1号館改修に向け、より丁寧な調整を行い進めていきたい。
		I C T化の効果的な運用、長寿命化改修工事の円滑な調整、教科指導や行事等の充実を図る。	B		

●令和4年度「学校経営計画（スクールマネジメントプラン）」実施段階●

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
				最終	
国語	国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を育成する。	「主体的・対話的で深い学び」の授業スタイルを通して、ICTを活用した研究・実践を進め、技術や方法を共有し、「チーム国語科」として効果的な指導を行う。	A	A	本校国語科学習の基礎力養成に効果的な方法の長年の蓄積をいかした自学教材作成の工夫を通じて、さらに発展総合させ、令和4年度入学生が取り組む入学前課題のオリジナル教材開発作成を行った。令和5年度入学生にもさらに充実させたものを配布予定である。 ICT教材の開発を積極的に行うとともに、各種研修会に積極的に参加し、全てを国語科内で共有して生徒の学力向上に還元した。 チーム国語科として、新しい時代に即した指導内容を今後も工夫発展させていくことが課題である。
		生徒の多様性に対応した「個別最適化」した学習指導を行うことによって、主体的に学習を進めるための具体的方法と考え方を身につけさせる。	B		
地歴公民	興味・関心と学習意欲を高め、自ら学ぶ力、考える力を育成する。	板書、プリントを充実させ、資料（写真、統計、史料等）や視聴覚教材を有効に活用する。	B	B	板書、プリントを充実させ、資料（写真、統計、史料等）や視聴覚教材の有効な活用に努めた。 電子黒板のより効果的な活用のために情報交流に努め、ICTを活用した授業の構築に取り組んだ。今後も各教員が各自の課題改善に向けた研修を続けていかなければならない。
		ICTを活用した授業やアクティブラーニングの授業を研究・実践し、「主体的・対話的で深い学び」による思考力・表現力等の育成を図る授業改善に取り組む。	B		
数学	学習意欲の向上を基盤にした主体的学習者の育成を目指し、数学的・論理的思考力の獲得をとおして、実践問題に積極的に取り組む態度を養成する。	小テスト、定期考査、模擬試験の到達度目標を早期に提示することで、学習計画の作成を習慣化させる（手帳およびチェックシートの活用）。目標へ向けた取り組みの過程においては、個々の生徒の学習方法を生かすように工夫する（個別最適化）。また、習熟度の高い生徒向けには数学検定を中心として、数学オリンピックや数学コンテストへの参加を促し、授業とは異なる観点で数学に触れる機会を増やす。	A	A	・授業展開の工夫や新たな教材開発等により概ね予定通り実施することができ、日々の学習の習慣化に結び付けることができた。また、数学オリンピックや数学検定に挑戦しようとする一定程度の生徒はいるが、継続的な受験に結び付けることはできなかった。 ・ICTを活用して、より視覚的に、数学の事象を捉えさせることができた。また、授業の中で生徒が取り組んだ答案等をクラス全体で共有して課題解決に役立てた。今後は獲得した能力を生かして、論証する力を育成していく必要がある。 ・観点別評価を意識した発問・問題の提示を行い、ペアワークやグループ学習等を実践して生徒が主体的に考える授業展開を行った。観点別評価と総合評価の相関性を各学期の終わりに点検した。
		深い学びにつながる発問の仕方や視覚的教材の活用を今年度も継続して検討する。また、提出されたレポートや記述形式の添削課題を、ICTを利用することによって生徒間での共有を図り、協働学習などをとおして学びを深め、数学的、論理的思考力を洗練させる。	A		
		新学習指導要領の実施1年目を踏まえ、指導計画や評価（従来の評価と観点別評価）の整合性について昨年度の試行を基に今年度は実践をとおして教科内で検討し確立する。	B		
理科	基礎的な知識・技能を習得し、見通しを持って学習に取り組み、日常生活を科学する学修者を育む。	思考力・判断力・表現力を育むための実験・実習を積極的に行う。	A	A	コロナによる学習活動への制限が緩和されたことにより、多くの講座で実験・実習を行うことができた。3年化学では毎週実験をするという取り組みを何週にもわたり実施した。 指導と評価の一体化のために、教科内で現状と課題を共有し、意見交換を行い不断の見直しを図る雰囲気醸成された。 秋季公開授業では、理科教員全員がテーマを設定して授業を公開し、また他教科の参観も行った。残念ながら、参観者数は0の講座も多かったが、全員公開の取り組みは今後も続けていきたい。
		観点別評価法をさらに研究し、「指導と評価の一体化」の観点から、授業改善を行う。	B		
		教材や授業を教科内外へ公開し共有する。	A		
保健体育	体育・保健の見方・考え方を働かせて課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を育成する。	具体的な知識と汎用的な知識とを関連させて理解できるようにするとともに、科学的知識を基に技能を身に付けたり、技能を身に付けることでその理解を一層深める等、知識と技能を関連させて指導する。また、1年生の授業においては、技能の向上に向け、ICTの有効活用を積極的におこなっていく。	B	B	体育においては、具体的な知識を与え、グループワークや振り返りシートを活用し、技能の向上を図った。特に今年度は、1年生の授業においてICTの有効活用ができ、知識の理解とともに、技能の向上にも一定の成果を上げることができた。 ICTを活用した保健授業を展開し、自ら課題を発見し、解決に向けた思考・判断力や発表活動を通して他者に配慮しながらも自らの健康について主体的に考える力を身につかせた。 体力の向上を重視し、健康や体力の状況に応じて自ら体力を高める方法を身に付けさせた。 実社会でも生かせるように、個々に応じた体力の向上や生涯にわたる心身の健康の保持増進のために運動を継続的に取り組ませることが課題である。
		自他や社会の課題を発見し、合理的、計画的に解決したり、新たな課題の発見につなげたりすることができるよう知識を活用したり、応用したりして、思考し判断したことを、根拠を示したり他人に配慮しながら、言葉や動作などで即座に表したり、図や文章及びICT機器等を活用して筋道を立てて伝えたりすることができるよう指導する。	A		
		愛好的態度及び健康・安全、公正、協力、責任、参画、共生について、汎用的な知識を関連させて指導することで、主体性を促し、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現していく資質・能力を育成する。	B		
芸術	音楽：新学習指導要領の趣旨を踏まえた学習指導の徹底を図るとともに、本校生徒の実態に即した授業展開の工夫に努める。 美術：新学習指導要領の趣旨を踏まえ、主体的に学習する生徒の育成に向けた授業となるように努める。 書道：書に親しむ活動を通して、感性を高め、書写能力の向上を図り、主体的な学習者の育成に向けた授業展開を行う。	主体的に音楽に関わり、感受する力を育成するため、表現、鑑賞のそれぞれの学習内容について、批評活動を積極的に取り入れる。	B	B	コロナによる制約の中でも相互発表等の機会を可能な限り設定し、一定の成果を収めた。一人一台端末の導入対応については、授業記録や実技活動の動画提出などで活用することができた。 読書感想文集の発行がなくなったので、当初計画していた「学校の諸活動と連携した取り組み」については取り上げることが出来なかった。しかし、そのほかの課題では具体的方策に書いたような視点を確認しながら制作し、一定目標を達成することが出来た。 「漢字の書」「漢字仮名交じりの書」「仮名の書」に加え、「篆刻」の制作を実施し、選択者全員で押印した合作を作成した。また、生活の場で生かされている書に目を向け鑑賞する姿勢を養った。各分野において批評活動を取り入れた。
		作品の校内展示や学校の諸活動と連携した取り組みを進め、美術やデザインと社会の関係性について考えたり、客観的な視点で自分の表現を見つめさせる授業にする。	B		
		主体的な書の表現及び鑑賞の幅広い活動に取り組み、批評活動を積極的に取り入れた授業展開を行う。	B		

●令和4年度「学校経営計画（スクールマネジメントプラン）」実施段階●

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
				最終	
英語	英語学習における「主体的学習者」を育成する。	授業、家庭学習を通して、主体的に英語力向上に取り組めるよう、ICTを効果的に活用するとともに、1年間の学習計画と効果的な学習方法を明確に示す。	A	A	【成果】●全学年で、生徒が学習計画を立てやすいように小テストや週末課題の年間計画を配布することができた。●ICTを効果的に活用することで、生徒の活動量を増やすことができた。●今年度は3学年においてもパフォーマンステストを実施し、「やりとり」に関わるような簡単な即興応答やディスカッションを実施することが出来た。 【課題】●「話すこと」のうちの「発表」については従来から継続的に取り組むことができていたが、新たに分類された「やりとり」に関わるパフォーマンステストや活動については、全学年で段階的●体系的に実施できるような計画を考えていく必要がある。 ●適切な家庭学習課題内容や量の設定を、継続的に検討していく。
		教員による解説を簡潔にし、ペア・グループワーク、パフォーマンステスト等を通し、生徒の英語の発話量・読解量・活動量を増やす。	A		
		従来から続けているパフォーマンス課題をさらに推進し、課題内容と評価の改良に取り組む。昨年度改良した即興応答、ディスカッション、リテリング式を可能な限り継続するとともに、これまで実施していなかった第3学年でもパフォーマンステストを実施する。	B		
家庭	人の一生と家族・家庭及び福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技能を総合的に習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる。	講義や実習・実験を通して、家族の健康と衣食住についての知識を身につけさせ、実践する力を育てるように指導する。また、清潔に衣服を管理し、時には取れたボタンをつけ補修する程度の力を育てるため、被服製作実習を取り入れる。	B	B	●食生活分野では、高校卒業後の生活の中で朝食の欠食が増加する現状と問題点や、中食を利用する際の注意点など、一人暮らしと食生活の課題を考える時間がとれた。●経済分野では成年年齢が18歳に引き下げられることから、家計（収入と支出）の構成や、契約に関してなど、成年として生活する権利と責任について理解することができた。特に、契約をめぐる困ったことが生じた際の「188（いやや）」は記憶に残った生徒が多い。●被服製作では、①「並縫い」「半返し縫い」「本返し縫い」「まつり縫い」「ボタンつけ」をするのは、これからミシンを持たない一人暮らしでズボン等の裾がほつれた時シャツのボタンがとれた時など、自分で直す意識を育てるため「壁掛けティッシュケースカバー」を作製した。結果として、ほとんどの生徒が非常に積極的に取り組むことができていた。●保育分野では、赤ちゃん人形を使用し子どもを抱くときの注意点を体感することができた。また、遊びを通して乳幼児の発達を知ることができた。●今年度、調理実習の実施はできたが、供食を避けるためメニューとなり、調理技術を身につける方法に課題が残る。
		消費生活について、経済のしくみを理解し、生活を管理できるように指導し、ロールプレイなどを行い、消費行動が環境問題に関わることの理解を深める。また、18歳成年年齢となることから、消費トラブルに巻き込まれないように、動画やICTを利用しながら巻き込まれた時の対処方法なども身につけさせる。	B		
		乳幼児と高齢者の生活や福祉についても、ライフステージごとの心身の変化を「シニア体験」「マタニティー体験」実習により理解を深める。	B		
グローバルサイエンス	教科間、または大学や外部との連携を通して、予測不能な時代で活躍するのに必要な資質・能力である「5C」の育成を図る。	第1学年の各GS科目の評価方法において、適切なパフォーマンス課題及びそれを評価するためのルーブリックを作成し、運用する。	A	B	GS探究Iでは、特に理科と英語のこれまで以上に密な連携をとることができ、生徒がより主体的に取り組めるようになった。 GS探究IIでは、GS探究Iからのつながりをこれまで以上に意識しながら取り組めるようにした。 GS探究IIIでは、予定していた行事を実施することができた。次年度は、アンケートの結果をもとに、特に行事の実施時期についての改善を行う。
		第2学年のGS探究IIにおいて、いずれの研究テーマでも共通する探究の過程を重視したカリキュラムを構築、実践する。	B		
		第3学年のGS探究IIIにおいて、探究活動を行うのに必要となる資質・能力5Cを高め、大学での学びに備えるための、カリキュラムを構築、実践する。	B		

<p>学校関係者 評価委員会 による評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● SSHの取組については、順調に進められている。 ● LGBTQへの対応や18歳成人による主権者教育・消費者教育・金融教育等について高校が担う役割が今後益々多くなっていくが、同窓会など外部の人材を活用して進めて欲しい。 ● 広報活動については動画を公開するなど工夫がされている。中学生、保護者向けに加えて、中学校や私塾の教員にさらに学校の魅力を伝えられるよう工夫して欲しい。 ● 入学を志望する生徒の範囲が京都市・乙訓地域全域に広がっているのは、学校が評価されている証でもある。一方で地域と学校のつながりが薄れているように感じられるので、何か地域と連携した取組ができないだろうか。
<p>次年度に 向けた改善の 方向性</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 「主体的学習者の育成」と「生徒個々の進路目標の達成」が両立できるよう、年間行事計画や学校行事の内容等について検討を進める。 ● 1人1台端末（BYOD）を中心とした「桃山まなびのICT化」等、教育の根幹に関わる研究課題について、全校体制で取り組むとともに、外部人材の有効活用について研究を進める。 ● SSH3期4年目を迎えるにあたり、GS科目探究Ⅰ・Ⅱの充実や、トップ人材の育成プログラム、パフォーマンス評価研究等、今期の中心的課題への取組を進める。 ● 生徒の状況や心理の変化を把握し、支援の必要な生徒に対して、早期に組織的に対応できる体制を整える。 ● 本校の魅力創出と発信について、手法の研究を行う。